

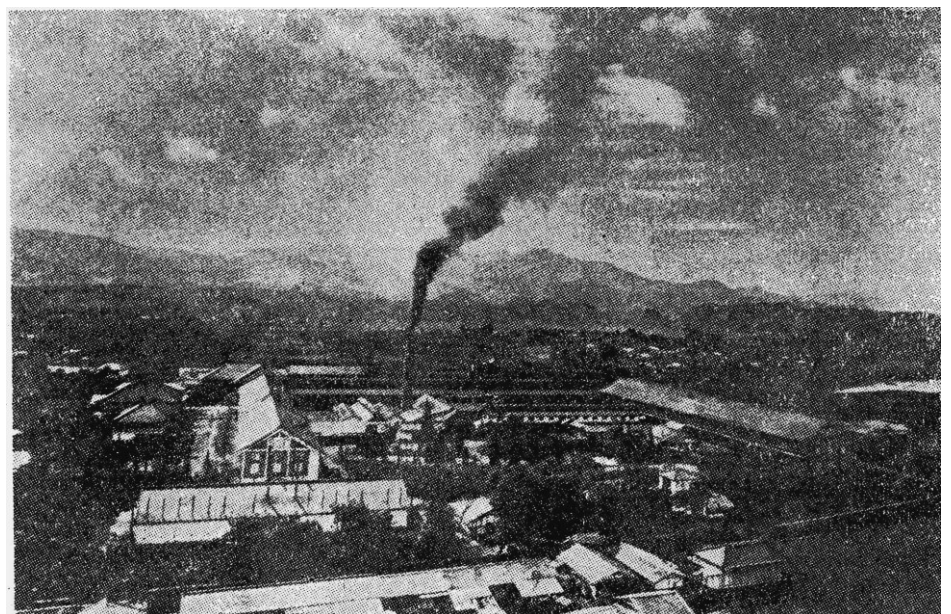
第7話 文化の発達

一方では産業、貿易も興り、いろいろな文化も益々健全に発達するが、
又、西洋風に溺れる者も生じたために、国粹保存も起こる。

産業の進歩

立憲政治の準備が進むと共に、一方では産業、貿易も漸く興った。とりわけ工業の進歩が著しかったが、これには政府の奨励と保護とが大いに与かって力があつた。即ち、政府は、模範工場を設け、或いは民間の企業家に補助金を与え、資本を貸してやったりしたのみならず、技術を習わせるために職工を洋行させたり、又、工業教育を施すために学校を建てたり、諸種の製造試験所を建てたりした。

例えば、模範工場として設けたものには、明治5年の群馬県の富岡製絲場、同7年の東京深川のセメント製造所、同9年の東京千住の製絨工場、および品川の硝子製造所、10年の群馬県新町の屑糸紡績所、14、5年の広島、愛知の紡績所などがある。これらの模範工場に倣って、民間にも私立工場を起す者がだんだん出て来たために、我が工業界は頓に面目を改めるに至つたのです。



群馬 富岡製絲工場
繰絲工場も倉庫も娯楽場も創業当時ままの煉瓦建築
2014年に世界遺産登録

交通の便

また、産業を発達させるには、交通の便をよくすることが最も必要だが、これに就いても政府は大いに力を尽くしたり、保護を与えたりした。即ち、陸上にはますます鉄道が敷設されると共に、海運界には、政府が専ら保護した日本郵船や、大阪商船などの諸会社が起こつて、内外の交通、運輸がきわめて便利となつたのです。そこで、商業も従つて起こり、海外との貿易もまた大いに開けた。

貨幣制度の確立

貨幣制度は、新政府には金貨幣、銀貨幣、銭貨幣の三つがおのおの独立して、互いに本位、補助の關係が全くなかつた上に、両、分、朱、貫、匁、文などの呼名もやや複雑であつたのみならず、各藩でそ

第7話 文化の発達

の領内だけに通用する紙幣を勝手に発行していたりしたので、この実際の流通状態は頗る煩雑をきわめていた。

それで、政府は明治3年11月、新貨幣法を發布して、一円の銀貨でもって本位貨幣、即ち基本の貨幣とすることにしたが、翌4年5月、更に金本位制を採用する事になったために、改めて新貨幣条例を發布して、貨幣の種類を、本位金貨は20円、10円、5円、2円、1円の5種に、補助銀貨は1円、50銭、20銭、10銭、5銭の5種、補助銅貨は2銭、1銭、半銭、1厘の4種とした。いづれも10進法の数え方で、円、銭、厘の新しい呼び名の下に統一したのです。

経済界の安定

とはいえ、実際の財政は、維新以来、歳入が少なく、逆ももろもろの経費を支弁するには足らなかつたので、政府はその不足を補わんがために頻りに紙幣を発行した。西南の役後はことにそれが甚だしくなつたところから、ついに紙幣の価が下がって、物価が高くなり、その弊害がおいおいに現れて来た。そこで、兌換の制度、即ち紙幣を正貨と引き換えるという制度を始めて、これを整理することとし、日本銀行を設けて、もっぱら兌換券を発行させた。これより経済界は大いに安定するに至つたといわれる。

信教の自由

こういう間に、諸種の文化もますます健全な発達を遂げたが、とりわけ話しておきたい事の一つは、信教の自由を許された事です。

廃仏毀釈

維新のはじめの頃には、復古の気分が社会にみなぎって、一時、神道を盛んにして仏教をおさえようとした運動が起こつた。所謂廃仏毀釈がこれで、寺塔を破り、仏像を壊すものさえ現れたが、しかし、千数百年來の信仰が、そんな事くらいで容易に破れる筈がなかつた。仏教は少しも衰えなかつたのみならず、これまで久しく安逸をむさぼっていた僧侶らは却つてこのために目ざめて、社会の教化につくすような傾きとなつて来た。

また、キリスト教は、江戸時代以来、明治の初年になつてもなお国禁の宗教でしたが、明治3年に至り、政府は外国公使の抗議によって、拘束中の長崎付近浦上村の信者40人を解放したり、また条約改正のさまたげになるとの理由で、明治6年の初め、切支丹禁制の高札を取り去つたりしたので、キリスト教の布教は、いわば黙認の形となり、外国から宣教師が来て熱心に布教したばかりか、わが国人にもはやくこの伝道に従う者もいた。

新島襄の同志社

中にも旧上州安中藩士新島襄は、幕末、その禁のまだ厳しかった元治のころに、ひそかにアメリカに渡つてキリスト教を研究していたが、明治7年12月、帰朝、翌8年11月、京都にキリスト教主義の学校同志社を建てて、教育と伝道に全力を注いだのです。

それで、その頃からキリスト教もようやく行われて、信者の数も次第に増すようになった。とは言え、なお民間の迫害は容易に止まなかったが、憲法が公布されるに及んで、信教の自由が許されたので、ここにはじめて宗教上の争いは止んで、各宗各派共にそれぞれ円満な発達を見るようになった。

きょういく はったつ
教育の発達

また、教育は、明治5年8月に学制がしかれてから、普通教育が行きわたると共に、帝国大学および各種の専門学校が設けられて、高等の教育もおいおいに進んだのみならず、今まで世に顧みられなかった女子教育および実業教育などもようやく興った。学校にも、官立、公立の外に、私立の学舎も少なからず設けられたが、中でも殊に著名なのは福沢諭吉の創めた慶応義塾、大隈重信の起こした東京専門学校などです。

ふくざわ ゆきち けいおうぎじゅく
福沢諭吉の慶応義塾

福沢諭吉は、安政6年9月、幕府の外国奉行新見豊前守正興が、例の最初の通商条約の交換のために、我が国最初の遣米使節としてアメリカ合衆国に赴いた時に、その随行員となって渡米した一人であって、後、文久元年にもまた幕府の使節の一行に加わってヨーロッパに行ったりもした。早くから世界の事情に通じていたので、すなわち洋学をもって新文明を開こうと、慶応3年、慶応義塾を京橋の鉄砲洲に開きました。



ふくざわ ゆきち
福沢諭吉

戊辰の上野戦争の時に、彼が講義している室外にも、市民のあわて騒いで駆けて行く音が聞こえたり、轟然たる大砲の音や豆を炒るような小銃の音なども遥かに聞こえて来たりしたが、彼はしばらくも講義を止めようとしなかったばかりか、生徒らが外の騒ぎに気を取られて、そわそわしているのを見ると、戦争と学問との別なものである所以を説いて、「今日、江戸中で机に向っているところは恐らくはこの慶応義塾だけであろう。これに対して、諸君は大いに誇りを感じなければならない。しかるに、日本人同士の区々たる小ぜりあいぐらいに気を取られるような事で、どうして将来この日本の新文明を築こうという大使命を果たすことが出来るか。」と、火を吐くような熱弁で、しかも諄々と遠大な抱負を述べた。生徒らは皆深く感動して、それから銃声がいかに烈しく聞こえて来ても、もはや誰一人としてこれに耳を傾ける者も無かったということです。

とうきょうせんもんがっこう
東京専門学校

また東京専門学校は、大隈重信が明治14年に国会開設の遅速の問題で、薩長系の参議らと意見を異にし、ついに余儀なく職をやめて野に下らなければならなくなった時に、同時に会計検査院一等検査官の職をやめた小野梓らとはかり、政治と学問とは断じてこれを分離しなければならないという主張から、所謂学問の独立を唱えて、明治15年10月にこれを開いたのです。初めは政治科、法律科および理学科を設け、邦語で専門の学科を教授するのを眼目としたが、外に英語科を置いて、自治の精神に最も富んでいる英国人

第7話 文化の発達

風きふうの気風かんふうを涵養しようとしたといわれる（訳注：今の早稲田大学です）。

教育勅語

こうして、教育せつびの設備そなはいよいよ備
わったが、維新以来、しきりに西洋ぶんぶつの文物
制度の輸入につとめた結果、ややもすれば
その文明ぶんめいに酔ようて、わが国情こくじょうに合わない
思想しゆなども、何の差別さべつもなく鵜呑みにして
しまったために、ついにはわが国古来の道
徳とくをも軽んじるような風潮ふうしやうさえ起こっ
て来た。例えば、わが国古来の美風びふうで

ある忠孝仁義ちゆうこうじんぎの道みちなども、まるで未開野蛮みかいやばんな遺風いふうかの如ごとくに嘲あざけって、これを修身書しゆうしんしょから除のぞくべきだとい
う意見を抱いだく者ものさえいるようになったのです。まことに以もつての外ほかの考えちがいで、そのために国民
の思想しゆも動揺どうりやうし、従したがって、教育の方針ほうしんにも迷まようような有様ありさまになって来た。

そこで、明治23年10月30日、天皇は教育に関する勅語ちよくごを下くだされ、国民道徳おおもとの大本しめを示された。実
に第一回の帝国議会在東京に召集しやうししゆうされる約一ヶ月前のことです。

朕ちんおも惟わうに、我が皇祖皇宗こうそ国を肇そうこくめること宏遠こうえんに、徳を樹とくてること深厚しんこうなり。

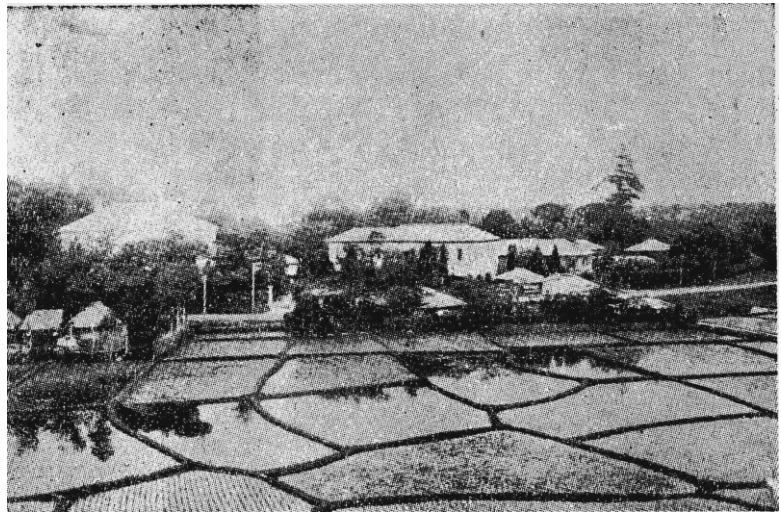
我が臣民しんみん克よく忠ちゆうに、克よく孝こうに億兆おくちやう心こころを一いちにして世々よよ厥その美びを濟なせるは、これ我が国体の精
華かにして、教育きやういくの淵源えんげんまた実じつにここに存そんす。

爾なんじ臣民しんみん父母ふぼに孝こうに、兄弟きやうだいに友ゆうに、夫婦相和ふうふあいわし、朋友相信ほうゆうあいしんじ、恭儉きやうけん己おのれを持じし、博愛はくあいを衆
に及およぼし、学がくを修おさめ業ぎやうを習ならい、以もつて知能ちのうを啓發けいはつして、徳器とくきを成じやう就じゆして、進すすんで公益こうえきを広ひろめ、
世務せいむを開ひらき、常つねに国憲こくけんを重おもんじ、国法こくほうに随したがい、一旦いつたん緩急かんききゆうあれば義勇公ぎゆうこうに奉ほうじ、以もつて天壤
無窮むきゆうの皇運こううんを扶翼ふよくすべし。

是これの如ごときは独ひとり朕ちんの忠良ちゆうりやうなる臣民しんみんたるのみならず、又また以なんじつて爾そせんの祖先いふうの遺風けんしやうを顕彰けんしやうする
に足たらん。

この道みちは実じつに我が皇祖皇宗こうその遺訓いくんにして、子孫臣民しそんしんみんが俱ともに遵守じゆんしゆすべき所ところである。之これを古今
に通つうじて謬あやまらず、之これを中外ちゆうがいに施ほどこして悖もとらず、朕ちんは爾なんじ臣民しんみんと俱ともに拳けん々けん服膺ふくようして、咸みなその徳
を一いちにせんことを庶こい幾ねがう。

ここにおいて、教育の方針ほうしんも確立かくりつし、国民の向うところも初めて明らかになった。爾来じらい、教育勅語きやういくちよくごは、
全国の各種さんだいせつの学校で、三大節さんだいせつをはじめ、大切な儀式には、必ず奉誦ほうどくされることになった。今日においては、
国民の殆ど大多数がこれを暗記あんきしているというくらいになっている。（訳注：戦後、1948年にこの教育勅語は公
おおや



東京専門学校 今の早稲田大学の前身

けでは廃止になりました。)

めんぼく あらた ぶんげいびじゆつ
面目を改めた文芸美術

教育が発達するにつれて、^{がくじゆつ}学術も大いに進歩したが、文学や美術も時勢につれてその面目を改めた。明治初年の頃には、江戸時代末期の文学をそのまま承継いだ所謂戯作者流の洒落と滑稽と道楽とを唯一の生命としたような、^{すこぶ ようち}頗る幼稚なもののみが行われていたが、やがて西洋の書物がしきりに^{ほんやく}翻訳されて、新しい思想が^{しそふ しやうかい}紹介されると、間もなく政治小説がさかんに起こって、一時、小説界を風靡した。

時代が政治上の^{へんかく}変革の後を承けて、例の国会開設を要求する声の方々にあがっていた時でしたから、世間の^{きやうみ}興味もまた一般に政治に向っていたのでしよう。

しんぶんがく みち ひら つぼうちしやうよう
新文学の道を拓いた坪内逍遙

しかし、明治15年4月に初めて新体詩というものが現れて、後年、日本詩壇の中心となった長詩の一体をおこす先駆となった。ついで18年5月には、坪内逍遙の芸術論『小説神髓』とその趣旨を具体化して見せたといわれる『当世書生気質』とが出て、まことの新文学の道を拓いた。

すると、^{たちま}忽ちこの主張に啓発されて、^{ふたばていしめい うきぐも}二葉亭四迷の『浮雲』が現れた。この作は、その文体が全く新しい原文一致体で、今日のこの口語文体の基礎を据えたという点でも、特に注目すべきものとされている。

ついで、^{おざきこうよう}尾崎紅葉を中心とした硯友社の人々も、この新気運に乗じて活動を始めて、これより明治の文学は非常に盛んになった。



つぼうちしやうよう
坪内逍遙

やうがく りゆうこう
洋楽の流行

音楽の洋楽もまた早くから行われたが、これを最初に我が国に導き入れたのは、キリスト教と軍楽です。キリスト教は礼拝のために賛美歌をうたった他に、布教のために夙に女学校を各地に設けて唱歌を教えたのです。軍楽は、明治以前から諸藩に行われた所謂鼓隊がその始めですが、明治4年に兵部省がこれを一つに集めてから、ここに初めて軍楽の端緒が開けたのです。

わがびじゆつこうげい ふっこう
我が美術工芸の復興

又、明治の初めには、何事も新を競うあまり、我が国固有の文化は、何もかも旧弊であるとして、濫りに打破することをつとめた。旧来の名画や名器をも卑しんだくらいでしたので、従って狩野派の天才狩野芳崖、橋本雅邦の絵画なども、ほとんど世に顧みられなかった。しかしその後、世人もおいおい我が固有の美術の重んずべきを悟り、美術学校も設けられて、もっぱら国風の技術を教授するようになったために、やがて我が美術、工芸も大いに復興の機運に向った。

第7話 文化の発達

きょくたん おうかしゅぎ 極端な欧化主義

さて、西洋文化の輸入が維新当時の一般の風潮であった事は、以上に述べて来たところでもおわかりと思うが、当時の人々は、こうして何もかも西洋風に倣う事を「文明開化」と称して、競ってこれに赴いたのです。

服装や、食物や、住宅などを西洋風にしようとしたくらいは未だ良かったが、次第にそれが甚だしくなると、例えば、学校の講義なども、大学程度のところは勿論、中学程度のところでさえ教師は外国人が多かった上に、教室内では日本語を厳禁するといったような有様でした。中には日本人の教師が、わざわざ英語で講義の下書きを作って来て、これを教室で読み上げるというようなことさえも行われたが、その馬鹿々々しさを誰もあやしまなかったほどに、当時の人々は西洋風に溺れてしまっていたのです。

その最も極端な例として、よく話の種となるのは、「国語を一変して英語にしよう」という意見を、政府部内における一部の者が、まじめに抱いていたことです。後に文部大臣となって、名文相の名の高かった森有礼のような人も現にその一人で、彼は明治5年に中弁務士としてアメリカ合衆国に在った時に、この意見をもって言語学の泰斗であるエール大学教授ホイットニーに正して見た。ところが、ホイットニーは極めて厳正な学者の態度で、有礼の意見の甚だ無謀なのを指摘して、一国の開花は必ずその国語によらなければならぬ所以を説いて聞かせたので、有礼はその計画を思い止ったといわれる。

こくすいほぞん 国粹保存

こうして、文化の輸入も、熱心なあまりに非常識に走ったりして、我が良風美俗をそこなうような事も少なくなかったので、ついにこれに反対して、国粹保存の論が起こり、これに伴って旧来の事物を尊重する風が生じた。能楽、芝居などが再び流行して、広く世間一般の娯楽に供されるようになったのも、その一端のあらわれです。

(第7話 文化の発達 終わり。 次は前頁に戻り、第8話 朝鮮事変と天津条約)